

# 海外研修 in KOREA

期 間：2010年8月1日（日）～6日（金）

研修先：・ Wilson Leprosy Center  
& Rehabilitation Hospital（麗水）  
・ ソウル国立大学附属病院分院（ソウル）

参加者：江本（院長） 岩井（副院長） 樋口（主任看護師）  
沖田（看護師） 池田（理学療法士）



まず、韓国の医療制度についてですが、韓国の医療制度は、日本の制度を少し参考にしてあるとのことでした。日本人の医療費負担は大まかにいうと3割負担で高齢者が1割負担です。韓国は、年齢を問わずすべての人が2割負担ということでした。

また、韓国の人工膝関節は年間約7万件。日本も年間約7万人で、ほぼ同じです。しかし、韓国の人口は日本の半分であることを考慮すると、人工膝関節は日本の2倍と言えます。それでは、今回の研修の報告をしていきます。

## 研修1日目。



福岡空港より飛行機で仁川国際空港に行き、仁川国際空港よりバスで金浦空港に向かい、金浦空港より麗水（よす）空港に行きました。そこで1つ目の研修先である WLC（Wilson Leprosy Center & Rehabilitation Hospital）のキム先生（Dr.Kim）と意見を交わしながら食事をしました。右の写真の右から2番目がキム先生です。

## 研修2日目。

本日、私たちが伺ったのは、WLC病院です。韓国の南の方にある麗水市にあり、そこは、田園が広がり海沿いの田舎の町でした。

WLC病院は1909年にハンセン病治療病院として開設されました。1995年に今回、手術を見学させて頂い



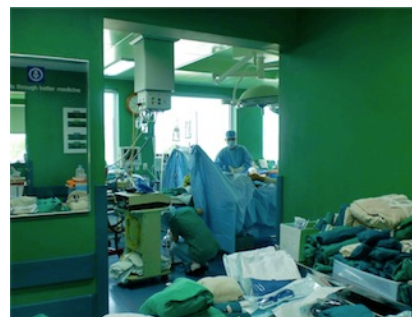
たキム先生が整形外科部長に着任し、人工関節センターとして再構築されました。また、隣接して病院のミュージアム（博物館）があり、写真や開設当時使用していた診察台や、使用した後の人工関節などが展示されていました。



WLC病院の人工膝関節の手術では韓国のトップの症例数を誇り、1年に2,800例以上です。その病院の院長であり、オペレーターであるキム先生がほとんどの手術をこなしています。おそらく一人のドクターが一年間にこなす人工膝関節手術件数では世界一かと思います。

ちなみに、キム先生はこれまでに30,000例以上の人工関節の手術を施行されているとのこと。現在、当院での人工膝関節手術は1年間に約200件です。いったいどうしたらそれだけの症例がこなせるか、全く想像もつきませんでした。

このWLCの手術室は4室ありました。4室は放射状に向かい合っており、スタッフが動き易いように手術室のドアは取っ払ってありました。一つの大きなエリアに4つの清潔エリアに分けられている形でした。手術室には大きな窓があり、海を一望できる環境です。「外の景色も楽しみながら手術をしたいから」と言う理由で取り付けたそうです。（やはりこの発想もただ者ではない！）



キム先生の手術は専属スタッフで構成されており、このスタッフ達があらゆる手術手技をアシスタントシテンポよくこなしていくことで、キム先生が行う手技を最小限に留めていました。キム先生が1つの膝に皮膚切開から人工関節を入れるまでに約10分程度。それが終わると次の手術室に入り皮膚切開から始められます。すなわち次の手術室には他の専属スタッフが、麻酔から消毒まで終わらせているということです。このように次から次へと約10分程度で手術が終わっていきます。このことで無駄なく時間配分がなされ手術が進んでいきました。専属スタッフ達はどうやったらキム先生が効率よくスピーディに手術をこなしていけるかを考え抜いた結果の集大成だと思います。1人1人の表情は、自信に満ちあふれ、プロの集団の貫禄を感じました。



この日は午前中の3時間半で12膝の人工関節が施行されました。





WLC病院でTKA（人工膝関節）を受けられる方は、前日入院し、手術前の検査を再度受けられて、手術に備えられます。翌日、手術が終了したら、まずは回復室で片膝の手術だと6時間、両膝だと24時間観察されるそうです。その後病棟へ移動されます。

TKAの入院期間かというと、冬場は忙しいので3~4日。韓国の夏はバケーションシーズンとの事で、時間にゆとりがあり1~2週間入院されるそうです。ちなみに当院のTKA入院期間は、2週間です。それを考えると、韓国の入院期間は短いと思いました。

病棟では日中、夜間ともに看護師2名で約42名の患者さんを見ているとのこと。日本と比べてあきらかに看護師が少なすぎます。しかし、入院の際は患者さんの家族の方が、必ず付き添いをされていました。家族が付き添いできない場合は、必ずヘルパーさんを患者個人で雇っていました。よって、少ない看護師で患者対応ができるんだなぁと思いました。韓国での全ての患者さんに対して付き添いがいるシステムには、とても驚かされました。手術で不安な状態の中、すぐそばに家族がいる事で、患者にとってはとても安心で、精神面でも大きな支えとなると思います。当院でも、家族の希望があれば、付き添いシステムを取り入れていくべきかなと考えます。



WLC病院には、4人の理学療法士が勤務されていました。年間2800例以上の人工関節が施行されているのに、理学療法士が4人しかいない・・・。どのようにリハビリを行っているのだろうか？というのがリハビリ室を見る前の率直な疑問でした。しかし、リハビリ室を見学させて頂き、「なるほど！！」と思いました。リハビリ室は、病院の割にそれほど広くはなく、手術後の患者さんたちがベッドに並んで腰掛けてありました。理学療法士は、腰掛けてある患者さんたちを順番に膝を曲げていました（一人につき5~10分くらい）。



理学療法士の方とお話させて頂きましたが、リハビリでは日常生活での、入浴動作や床からの立ち上がり動作の指導を重点的に行っているとのことでした。

やはり、国は違えども自宅に帰るにあたって大事なことは日常生活動作の指導であると改めて認識することができました。

この日の夜は、麗水市にある日本料理のレストランに行き、キム先生をはじめ、WLC病院のスタッフの方とディスカッションをしながら食事を行いました。手術の手技や合併症、また、スタッフのモチベーション向上のことなど、いろいろなこととお話しさせて頂きました。



ちなみに、レストランは日本料理と言いましたが、ものすごく韓国風でした。お刺身を食べるときに、日本であればお醤油が一般的ですが、ここではコチュジャンにつけて召し上がる方も多いとのことでした。（食べてみましたが、結構美味しかったです。



#### 研修3日目。

本日は移動日。麗水空港より金浦空港に戻り、ソウル市内のホテルに入りました。少し時間があつたため南大門市場？の方に行ったのですが、市場内を歩くと、右から左から日本語で「いらっしゃい！安いよ。」「海苔あるよ。」「見るのはただよ。」と声をかけられました。一軒のお店の人に、「どうやって日本語覚えたの？日本に行ったことあるの？」と聞くと、「本で勉強しました。日本には行ったこと無いです。」って。商売をする、仕事をするって、業績を上げるためには、普通にやってるだけでは駄目で、やっぱり努力をしなければいけないし、また、韓国の人たちのパワーをすごく感じさせられました。

#### 研修4日目。



本日は、2 つめの訪問先である、Seoul National University Bundang Hospital、ソウル国立大学病院分院に行きました。ちなみにソウル国立大学は日本で言う東京大学。韓国でもっとも優秀な大学です。（ご存じの方も多いと思いますが、韓国の受験戦争はかなりすごいです。受験に遅れそうだからといってパトカーで受験会場まで送ってもらったりするくらいです。それを考えると、東京大学より難しいところかもしれませんね。）



ソウル国立大学病院分院は 2003 年に開設し、現在 833 ベッド。2 年後の 5 月には拡張し 1300 ベッドになるとのことです。

病院に入ると、これまたびっくり。広くて、天井も高く、すごくおしゃれで、まるで高級ホテルのようなロビーでした。さすが韓国医療の最先端の病院って感じでした。（内心、すっごくお金がかかっているのだろうなあっても思いました。）ロビーの作りや、掲示板など、いろいろなもののセンスが、またすごくよかったです。当院にも取り入れたい部分の一つでした。



手術部門では、この病院の整形外科准教授であるCBチャン先生の手術見学をしてきました。チャン先生の専門はTKAとスポーツです。当院の専門分野と同じである所もかなり興味のある所でした。



とてもローテーションを行っているとは思えないほど先生の動きに素早く反応し、滞ることなくスムーズに手術が進んでいました。やはり、チャン先生の日頃からのスタッフ教育のたまものだろうと身にしみて感じました。

全体的にみて、手術の流れや手術設備、手術技術は当院でもソウル大学と大きな差を感じませんでしたが、やはりチャン先生の教育体勢にはほとんどん専門分野を追求する気迫を感じ、スタッフ教育の重要性を改めて感じました。



チャン先生はTKAを年間280例、ACLを150例しているそうです。人工関節センターとしては800施設ある中で韓国No2の実績があるそうです。最初に行ったWLC病院のTKAの症例に比べたらかなり症例数は落ちますが、韓国では最も文献発表をされており、学術的にリーダー的な存在であるそうです。また、感染コントロールの管理においても有名な先生だそうです。さすが超一流のDr. 誇れる部分も一流！！

今回、手術室見学ではTKAを3例の見学ができました。ACLの見学が出来なかったのは残念でした。手術室内は、もちろん申し分のない大病院らしい最先端の施設であり、とても充実した施設内でした。チャン先生の手術体勢はアシストDrと研修医とスクラブNsの4人体勢で行われていました。WLC病院のキム先生の場合は専属スタッフがいきましたが、チャン先生の場合、大学で常に研修医やスクラブNsの教育をしていく立場にあり、その使命があるため、常にローテーションで行ってあるそうです。しかし、手術の流れをみていると、

ちなみにチャン先生は私たちのためにすごく時間を割いてくれました。手術前には、今から行う手術の手技のレクチャーをし、手術直後にも今行った手術について説明して頂きました。また、手術と手術の間では、スライドを使っての勉強会をして頂いたり、病院の各フロアを案内していただいたり、電子カルテの事についてもレクチャーして頂きました。とにかく、すごく時間を割いて私たちのために説明して頂いてくれて、チャン先生の教育が本当に素晴らしいことを身にしみて感じました。



WLC病院もソウル国立大学病院分院もどちらの病院も教育体勢の違いはありますが、専門分野で生き残る為にプロの集団の教育体勢は欠かせないことを学びました。私達ももっと専門的なことを追求し、プロと呼ばれるスタッフになりたいです。



次に入院についてですが、入院は前日入院となり、期間は1～6週間で患者さんの状況によって変更されるとのことです。年々ソウル国立大学病院分院の入院期間はだんだん短くなって来ているとのこと。両膝の手術をされる場合は、5～7日間の間隔を開けて

反対膝をされていました。先日訪問した WLC 病院では、両膝を同時に手術されていました。

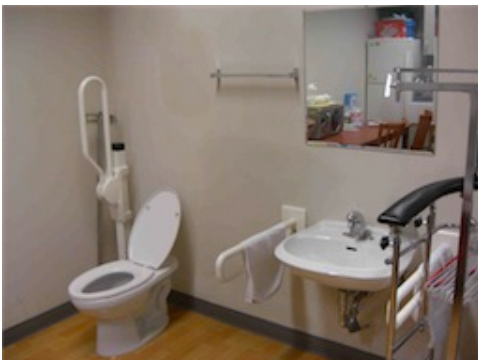
同じ国によっても、人工膝関節やり方や考え方は様々なんだと思いました。



ソウル国立大学病院分院でもすべての患者さんに家族が付き添っていました。患者さん自身と家族に転倒などの指導をされており、ベッドのネームプレート横にも転倒予防の表示がされていて、細心の注意をはかってあることが分かりました。当院でも取り入れていきたいと思います。



リハビリ室は、自転車エルゴメーターなどトレーニングマシンが置かれているトレーニング室、電気治療などを行う物理療法室、プール室、日常生活動作の模擬練習が行える部屋に分かれていました。手術後早期にリハビリを開始し、最初に膝を曲げることは患者さん自身に行ってもらおうとのこと。このことは痛みのコントロールにつながるということでした。



ここでも、リハビリで重点を置いていることは、日々の生活動作の獲得ということでした。一室にキッチンやトイレ、浴槽などを設置し、実際にその環境の中で練習を行っていくそうです。やはり、実際の動作を通じて練習を行うことで、患者さんはより理解しやすいと思います。このことは、当院においても取り組んでいる部分ですので、参考にさせて頂きたいと思います。

夜は、ソウル市内の焼き肉屋にて、ソウル国立大学病院分院の話をしながらか、食事を楽  
しみました。

研修5日目。

ソウル国立大学病院分院の2日目。しかし、ソウル国立大学病院分院で急遽、すごくシ  
リアスな会議が入ったため、見学2日目が中止になってしまいました。この日は夜も、チ  
ャン先生達と食事をしながらディスカッションする予定で、チャン先生にいろいろ聞きた  
いことがあったのですが、それも中止になり、すごく残念でした。しかし、どこの病院で  
も緊急会議はあるし、また、前日にすごく受け入れて、すごく時間を割いてくれたこと  
を考えると、感謝の気持ちがすごく大きいです。

さて、研修5日目がまるまる空いてしまいました。せ  
っかくなので観光をしました。免税店とソウルタワーに  
行きました。免税店ではブランドものが2~3割程度安く、  
お買い得でした。また、任天堂のゲーム、DSやWiiなど  
もあり、物というのは当たり前のように世界に広がって  
いて、今は何もかもが世界基準であると思いました。



夕食はソウルタワーの展望レストランで夜景を見ながら行いました。ソウルの人口は  
1,000万人以上。その夜景を観ながらの食事は最高でした。お勧めです。

研修6日目。

本日帰国。早朝5時半にホテルを出発し、仁川空港より福岡空港に戻りました。当院には  
屋前に着きました。海外でも韓国は本当に近いです。

総括。

岩井（副院長／診療放射線技師）

今回の研修で、韓国の病院の経営状況や、患者サービスをみると、韓国と日本の保  
険制度が似ていたため、それにより起こる問題点も似ていました。医療費削減を国から言  
われると、たとえ患者さんのために行っている検査や治療も保険を使ってできなくなっ  
てしまいます。しかし、必要な検査や治療はしなければなりません。韓国で私たちは、必要  
以上の検査や治療をいかに押さえるかなど、すごく勉強になりました。

また、2つの研修先、1つは個人病院、1つは国立の大学病院で全く違うタイプの病院  
であったにもかかわらず、それぞれのスーパーDr.は私たちに、同じように言いました。「患  
者さんにやさしい病院を心がけています。」と。医療の根本的な考え方は、どこの国のど  
この病院も同じだと思いました。



また、研修させていただいた2つの病院のスタッフのみなさんからもすごいパワーを感じました。自分の病院で働いている誇りとプライドがそのパワーを出していると思いました。当院も膝の専門病院として誇りとプライドがもてるような病院にしていかなければならないと思わせられました。

樋口（主任看護師）

前回もお話ししたように、私自身海外研修は今回で5回目。もうすでに最先端の医療現場を目の当たりにしていた私にとって、韓国の医療がこんにも最先端であったことに非常に衝撃を受け、とても新鮮な驚きが沢山あったと思います。

WLCもソウル大学病院もどちらもスーパードクターがいるだけではなく、その周りに取り巻くコメディカル達の存在は欠かせないと改めて痛感させられました。どこの国でも、やはりプロの周りにはプロの集団がおり、その働きかけによってより一層患者にとってももちろんの事、病院にとっても高い満足度が得られる結果に結びついていくのではないのでしょうか。

当院を取り巻く周囲の病院には膝を専門とした病院が多数あります。そんな激戦区の中、膝関節とスポーツの専門クリニックとしてこれからも支持されるクリニックである為には、当院の専門ドクターだけにおんぶに抱っこでは生き残れません。やはり私たちコメディカルの意識改革が何よりも重要であることを改めて考えさせられました。

院長の好きな言葉「What's new!」。研修の中で、全てが納得できるものばかりではないのですが、専門職をしている以上、常に次のステップを考える必要があり、そのヒントが大いにある研修でした。これからもっと専門分野を強みにできる一スタッフになれるように努めていきたいと思います。

沖田（看護師）

今回海外研修に行かせて、頂きすごい経験をさせてもらいました。

2つの病院に行き、今まで自分がやってきたことに対して、まだまだ出来てない世界にはプロの集団がいるんだと体験して思いました。

圧倒された感じでした。病院のドクターが言ってましたが、患者さんにやさしい治療すごくいい言葉だと感じました。私も、患者さんにやさしい看護が今できているか考えさせられました。プロとして見られているなら、それにあった知識をつけていくべきと、実感しました。

研修で学んだことを生かして当院で見学されて、恥ずかしくないプロの集団になりないと強く感じました。また、患者さんにもいろんな指導が出来ていけたらいいなと思っています。まだまだ未熟な私はもっと勉強して頑張っていこうとすごくいい経験になったと感じました。

池田（理学療法士）

今回、初めて海外研修に参加させて頂き、多くの刺激を受けました。外の世界を見たような、そんな感覚でもあります。

病院には、それぞれのスタイルがあり、スタッフ皆が一つになり、それを築き上げてい



くものだと思います。今回研修させて頂いた二つの病院は、スタイルは違うものの、「患者さんにやさしい治療を」と目指しているものは同じでした。

患者さんあつての病院です。病院にはできることなら行きたくないでしょうが、「また来たい!」と思って頂けるような、そんな病院であり、医療を提供できるように日々精進していかなければならないと思いました。当院を選んでくれる患者さんがいること、その期待に応えられるように今回の経験を少しでも多くのことに活かしていきたいと思います。

End。